AI エージェント時代の業務構造ガバナンス

―「座学だけの新人コンサル」が企業で働き始めるとき―

White Paper Draft v2.0
September 2026
EmzStyle LLC 前田稔

摘要

生成 AI は、「人間の問いに答える AI」から「人間に代わって行動する AI」へと進化しつつある。

AI エージェントは、文章や画像を生成するだけではない。

目的を与えられると、必要な情報を取得し、状況を解釈し、外部システムやサービスを利用し、他者や他の AI エージェントとコミュニケーションしながら、一連の業務を遂行する。

企業利用という観点から考えると、AI エージェントは、

膨大な知識を持ち、極めて仕事が速い一方、その会社での実務経験を持たない「座学だけの新人コンサル」

に近い存在として捉えることができる。

AI エージェントの重要な特徴は、従来のコンピューターシステムでは人間が事前に定義する必要があった「手続きの隙間」を、AI 自身の推論能力によって埋められることである。

しかし、ここに新しい問題がある。

AI は手続きの隙間を知能で埋められる。
しかし、手続きの隙間を埋められるということは、判断の隙間まで埋めてしまえる。

さらに、その判断以前に重大な問題がある。

企業の中で使われる「顧客」「受注」「納品」「完了」「承認」といった言葉の意味が、組織・システム・取引先の間で一致しているとは限らない。

AI エージェント同士が高度なコミュニケーション能力を持っていても、前提となる用語やデータの定義が異なれば、それぞれが正しく動作しながら、全体として誤った結果を生む可能性がある。

この問題は AI エージェントによって突然生まれたものではない。

ローコード／ノーコードの普及でも、システムを「作ること」が容易になる一方、業務設計やデータ定義が曖昧なままでは、正しいシステムにならないという問題が存在してきた。

AI エージェントは、この問題をさらに一段進める。

ローコードが「実装」を容易にしたとすれば、AI エージェントは「解釈」と「実行」まで容易にする。

技術が簡単になるほど、設計が不要になるとは限らない。

むしろ、これまで実装技術の背後に隠れていた、

目的、定義、データ、業務、判断、責任、権限、依存関係、例外

といった構造の品質が、より直接的に問われる可能性がある。

本白書では、この問題を AI エージェント時代における**業務構造ガバナンス**という観点から考察する。

そして後半では、この構造問題に対する一つの可能性として、EmzStyle Business Advisor（EBA）の考え方を AI エージェント領域へ応用できるかを検討する。

目次

Part I

AI エージェントが企業で働き始める

1. 「答える AI」から「行動する AI」へ

生成 AI の企業利用は、これまで人間との対話を中心として発展してきた。

質問する。

AI が回答する。

文章を作らせる。

分析させる。

要約させる。

最終的に、その結果をどう利用するかを決め、実際に行動するのは人間だった。

AI エージェントでは、この境界が変化する。

本白書では AI エージェントを、

人間または組織から与えられた目的や役割に基づき、必要な情報を取得し、状況を解釈し、外部システム、サービス、API、他の AI エージェント等を利用しながら、一定の業務を遂行する AI システム

として捉える。

生成 AI が主として「答える AI」であったとすれば、AI エージェントはデジタル空間で「行動する AI」である。

これは単なる機能追加ではない。

企業活動に、人間以外の新しい行動主体が加わることを意味する。

本白書では、これを**デジタル労働主体**として捉えてみたい。

---

2. 「座学だけの新人コンサル」として考える

AI エージェントを理解するために、一人の新人コンサルタントを想像してみる。

この新人は非常に優秀である。

膨大な一般知識を持っている。

調査が速い。

文章を書ける。

データを分析できる。

外国語も扱える。

相手とのコミュニケーションもできる。

システムも操作できる。

API 仕様を読んで利用することもできる。

しかも、ほぼ休まず働ける。

一方、この新人には決定的に不足しているものがある。

その会社で働いた経験である。

この会社で「顧客」という言葉が具体的に何を意味するのか。

どの段階から「受注」と呼ぶのか。

どこまで自分で判断してよいのか。

どの金額から上司の承認が必要なのか。

誰に相談すべきなのか。

マニュアルには書かれていない例外が何なのか。

過去に何があったから現在のルールになっているのか。

こうした企業固有の知識や判断構造を、この新人は最初から持っているわけではない。

AI エージェントも同様である。

問題は、能力が低いことではない。

能力が高いのに、業務上どこまで自分で判断してよいのかが構造化されていないことが、リスクになり得る。

---

3. AI は「手続きの隙間」を埋められる

従来、コンピューター同士を連携させるためには、人間が事前に詳細な手続きを設計する必要があった。

API 連携が典型である。

どの API を呼ぶのか。

どのパラメータを渡すのか。

どのデータ形式を使うのか。

返ってきた値をどう解釈するのか。

エラーなら何をするのか。

つまり、機械同士が会話できるよう、人間が先に「会話の方法」を決めていた。

AI エージェントでは、この一部を AI 自身が補完できる。

Web ページを読む。

説明文を理解する。

必要なサービスを探す。

API 仕様を読む。

相手から返された回答を解釈する。

情報が不足していれば追加質問する。

複数の候補を比較する。

これは大きな変化である。

AI は、従来人間が定義していた「手続きの隙間」を知能によって埋められる。

だからこそ、AI エージェントは従来型の自動化より柔軟なのである。

---

4. 企業の調達業務を AI エージェントへ任せてみる

具体的に考えてみよう。

ある社員が AI エージェントに、次のような依頼をしたとする。

「来月の展示会で使用するノート PC を 30 台確保したい。条件に合う調達先を探して、見積を取って比較しておいて。」

人間の担当者なら、この依頼を受けて多くの作業を行う。

必要スペックを確認する。

既存取引先を調べる。

必要なら新しい調達先も探す。

在庫を確認する。

納期を問い合わせる。

見積書を取得する。

送料や保守条件を確認する。

回答内容を比較可能な形式へ整理する。

情報が不足していれば再度問い合わせる。

社内の購買条件を確認する。

そして候補を絞り、依頼者へ報告する。

AI エージェントは、これらのかなりの部分を自律的に実行できる可能性がある。

ここまでは非常に便利である。

しかし、実際に処理を始めると、いくつもの問題が現れる。

---

5. 「確保」とは何を意味するのか

最初の問題は、AI の能力ではない。

言葉の意味である。

依頼者は「30 台確保したい」と言った。

では、「確保」とは何を意味するのだろうか。

在庫があることを確認することか。

販売店に取り置きを依頼することか。

注文を確定することか。

契約を締結することか。

決済まで完了することか。

同じ問題は「納期」にもある。

販売者が発送する日なのか。

指定場所へ到着する日なのか。

イベント会場へ搬入される日なのか。

社内で検収が完了する日なのか。

「価格」も同様である。

本体価格か。

送料込みか。

税金込みか。

保守契約まで含むのか。

さらに「同等品可」と書かれていたら、

何をもって同等と判断するのか。

CPU 性能なのか。

メモリー容量なのか。

OS なのか。

保証期間なのか。

企業のセキュリティ要件まで含むのか。

AI エージェント同士が完全に正常に動作していたとしても、それぞれが異なる定義を使っていれば、結果は一致しない。

これは単純なデータフォーマットの問題ではない。

Semantic、すなわち意味の問題である。

---

6. AI は「分からない」まま止まるとは限らない

従来型のシステムなら、想定していないデータが来ればエラーになることがある。

AI エージェントでは事情が異なる。

AI は文脈から意味を推測できる。

「一般的に納期とはこの意味だろう」

「この依頼なら確保とは在庫を押さえることだろう」

「このスペックなら同等品と考えてよいだろう」

と推論できる。

これは AI の優れた能力である。

しかし企業業務では、その能力自体がリスクになることもある。

用語が分からない AI より、用語を分かったつもりで処理を続ける AI の方が危険な場合がある。

「座学だけの新人コンサル」と同じである。

新人が、

「御社でいう『納品』とは、到着ですか、検収完了ですか」

と質問すれば問題は表面化する。

しかし、

「普通は到着を意味するだろう」

と考えて処理を進めれば、問題は表面化しないまま次工程へ流れる。

AI エージェントが高度になるほど、この「もっともらしい補完」は上手になる。

---

7. 手続きの隙間から「判断の隙間」へ

さらに調達 Agent は判断を迫られる。

候補 A は最安値だが、新規取引先である。

候補 B は 5%高いが、既存取引先である。

候補 C は納期が早いが、保証期間が短い。

どれを選ぶべきだろうか。

一般的な購買知識を持つ AI なら、合理的な比較はできる。

しかし、

「価格差が 5%以内なら既存取引先を優先する」

という会社固有の考え方があるかもしれない。

新規取引先には事前審査が必要かもしれない。

30 台の購入には部長承認が必要かもしれない。

情報セキュリティ部門が指定したメーカーしか購入できないかもしれない。

AI は一般的な合理性を持つことができる。

しかし、

一般的に合理的であることと、その企業において正しい判断であることは同じではない。

ここで、

手続きの隙間を埋める能力

が、

判断の隙間を埋める能力

へ変化する。

Part II

「作れる」ことと「正しい」ことは違う

8. ローコードが先に示した問題

この問題は AI エージェントによって突然生まれたわけではない。

ローコード／ノーコードでも、似た構造を見ることができる。

従来、業務システムを作るにはプログラミング技術が必要だった。

ローコードは、画面作成、データ接続、Workflow、条件分岐などを大幅に簡単にした。

その結果、システムを「作る」ことのハードルは下がった。

しかし、正しいシステムを作るためには別の問題が残った。

例えば営業部門と経理部門が、それぞれ「顧客」というデータを管理しているとする。

営業部門では商談中の企業も「顧客」。

経理部門では取引実績のある企業だけが「顧客」。

この状態で二つのシステムを簡単に接続できるようになっても、「顧客」という定義そのものは一致しない。

接続技術が問題を解決するわけではない。

むしろ簡単に接続できるからこそ、定義の不整合が顕在化する。

ローコードは Implementation を簡単にした。
しかし Business Definition までは自動的に正しくしなかった。

---

9. AI エージェントは問題をさらに一段進める

AI エージェントでは、さらに先へ進む。

プログラミングでは、

実装する人間

が必要だった。

ローコードでは、

実装は容易になった。

AI エージェントでは、

実装だけでなく、解釈と実行まで容易になる。

つまり、

Programming
→ Implementation がボトルネック

Low-code
→ Implementation のハードルが低下
→ Data / Business Definition の問題が露出

AI Agent
→ Interpretation / Execution のハードルも低下
→ Definition / Decision / Responsibility の問題がさらに露出

という変化として捉えることができる。

ここから一つの仮説が導かれる。

技術が簡単になるほど、設計の重要性は低下するとは限らない。

むしろ、下流の技術的制約が取り除かれるほど、上流にある構造の品質が結果を左右するようになる。

---

10. 全員が正しく動いているのに、全体が間違う

AI エージェント社会で特に注意すべきなのは、

個々の Agent が正常に動作していても、全体として正しいとは限らない

ことである。

調達 Agent が正常に動いている。

販売側 Agent も正常に動いている。

Identity 認証も正常。

アクセス権限も正しい。

決済も正常。

Cybersecurity 上の侵害もない。

それでも、

「納品」

という言葉について双方の意味が異なれば、業務は失敗する。

あるいは、

Agent A の Output を Agent B が確定情報として扱っているが、実際には A の Output が「推定値」だったということも考えられる。

これは Cybersecurity の問題とは異なる。

システム障害とも異なる。

AI モデルの性能だけの問題でもない。

構造の問題である。

---

11. Identity と Security だけでは足りない

AI エージェントが企業活動へ参加すれば、Identity は不可欠になる。

その Agent は誰なのか。

誰が Owner なのか。

誰の代理として行動しているのか。

どのシステムへアクセスできるのか。

何を実行できるのか。

AI エージェントを Identity として管理する技術は、既に具体化し始めている。

Cybersecurity も同様である。

不正な指示。

Credential の窃取。

過剰権限。

悪意ある外部サービス。

Agent の乗っ取り。

こうしたリスクへの対策は当然必要になる。

しかし Identity と Security が完全に機能していたとしても、別の問題が残る。

Security は、

「この Agent にこの操作を実行させてよいか」

を守ることができる。

しかし、

「その業務を、その構造で実行すること自体が妥当か」

は別問題である。

---

12. 「実行可能」と「業務として正しい」は異なる

ここを明確に区別する必要がある。

AI エージェントが、

正しい Identity を持ち、

正しい権限で、

正しい API を利用し、

仕様通りに処理し、

正常に決済した。

それでも業務が間違っている可能性がある。

なぜなら、

元の要求定義が間違っているかもしれない。

データ定義が違っているかもしれない。

判断条件が不足しているかもしれない。

本来必要な承認がプロセスから抜けているかもしれない。

Agent 間の依存関係が間違っているかもしれない。

つまり、

Capability to execute correctly

と、

Correctness of the business process

は別である。

間違ったプロセスを AI エージェントが正確に実行すれば、

Wrong Process × Autonomous Execution

になる。

AI が高速であるほど、その影響も高速化する。

Part III

AI エージェント社会に不足する構造

13. デジタル労働主体には「会社」が必要になる

AI エージェントをデジタル労働主体として擬人化すると、必要になる機能が見えやすくなる。

人間の社員には社員証がある。

職務権限がある。

業務ルールがある。

上司がいる。

購買権限がある。

会社の財布がある。

セキュリティがある。

監査がある。

AI エージェントにも同様の機能が必要になる。

社員証
→ Agent Identity

職務権限
→ Authorization

警備・SOC
→ Agent Security

購買権限
→ Economic Authority

会社カード・銀行口座
→ Agent Payment Infrastructure

内部監査・外部監査
→ Agent Audit

しかし人間の会社には、さらに重要なものがある。

「この会社では仕事をどう行うのか」という業務構造である。

---

14. Agent Builder は何を作るのか

AI エージェント構築技術そのものは急速に簡単になる可能性がある。

必要な Agent を自然言語で説明すれば、Agent 構築を支援する AI を作ることもできる。

これは知識の問題として扱いやすい。

「調達 Agent を作るには何が必要か」

「どの API を接続するか」

「どのような Workflow にするか」

「どの Security Control を入れるか」

こうした Agent Architecture の設計を支援する**知見 AI** は十分に成立し得る。

しかし、その前に問題がある。

「この会社における調達とは何か」

「確保とは何か」

「納品とは何か」

「同等品とは何か」

「どの判断を誰が行うのか」

「どの情報を FACT として次工程へ渡してよいのか」

「どこで Human Approval が必要なのか」

これらが確定していなければ、Agent Builder は曖昧な構造をそのまま自動化する可能性がある。

Agent をどう作るかという知識と、何を Agent 化するのが正しいかという問題は別である。

---

15. Knowledge の問題から Structure の問題へ

一般的な知見 AI は、

Knowledge
→ Question
→ Answer

という構造で非常に強力である。

しかし企業固有の業務については、正しい答えが世界のどこかに既に存在するとは限らない。

営業部門と経理部門で「顧客」の意味が違っていた場合、

どちらの定義が正しいかを Web 検索しても答えは出ない。

AI モデルを巨大化しても答えは出ない。

まず、

「定義が異なっている」

という構造を発見し、

企業自身がどのように扱うかを判断する必要がある。

ここで必要になるのは、知識量だけではない。

企業固有の現実を構造として形成する能力

である。

---

16. Business Structure に必要なもの

AI エージェントが企業活動へ参加するためには、少なくとも次のような構造が必要になる可能性がある。

Purpose
— 何のための業務なのか

Definition / Semantics
— 用語が何を意味するのか

Entity / Data
— 何を対象として扱うのか

Input / Output
— 何を受け取り、何を生成するのか

State / State Change
— 何がどの状態へ変化するのか

Process
— どのような順序で進むのか

Decision
— どこで判断が発生するのか

Dependency
— 何が何に依存しているのか

Actor
— 誰、またはどの Agent が行うのか

Responsibility
— 誰が結果について責任を持つのか

Authority
— どこまで実行してよいのか

Constraint
— 何をしてはいけないのか

Exception
— 通常条件から外れた場合どうするのか

Human / Agent Boundary
— どこまで AI へ委譲するのか

Stop / Escalation
— どの条件で停止し、人間へ戻すのか

Auditability
— 後から何を検証できる必要があるのか

この構造を、本白書では便宜的に **Business Structural Model** と呼ぶ。

---

17. 業務構造ガバナンスという論点

ここから、本白書の中心となる問いが現れる。

AI エージェントそのものは作れる。

Identity も作れる。

Authorization もできる。

Security も強化できる。

Payment も実装できる。

Audit も発展するだろう。

では、

それらすべての前提となる「仕事の構造」を誰が形成し、検証し、維持するのか。

本白書では、この領域を**業務構造ガバナンス**として考察する。

業務構造ガバナンスとは、AI を細かなルールで縛ることだけではない。

AI の出力を監視することだけでもない。

Human と AI Agent が参加する業務について、その目的、意味、データ、判断、責任、権限、依存関係、例外等の構造を形成・維持し、実行可能かつ検証可能な状態にすること

である。

この領域が独立した機能として必要になるのではないか。

これが本白書の問題提起である。

Part IV

業務構造ガバナンスをどう実現するか

18. Business Structure と Agent Architecture を分ける

ここでは二つを区別する必要がある。

一つは、

Business Structure

である。

企業の目的、定義、データ、業務、判断、責任、依存関係などを扱う。

もう一つは、

Agent Architecture

である。

Business Structure を前提として、

どの Agent を配置するか。

どの役割を与えるか。

どのツールを利用させるか。

どの権限を与えるか。

どこで Human Approval を要求するか。

どの Agent と接続するか。

を設計する。

概念的には、

Business Intent
↓
Business Structure
↓
Agent Architecture
↓
Agent Build
↓
Authorization
↓
Execution
↓
Audit

となる。

Agent Architecture は重要である。

しかし、その品質は上流の Business Structure に依存する。

---

19. 設計と監査を分離する

AI エージェント社会では、設計したものが設計通り動くかを確認するだけでは不十分になる可能性がある。

そもそもの設計が妥当だったのか。

定義が共有されていたのか。

判断条件が欠落していなかったか。

本来 Human が判断すべき事項を Agent へ渡していなかったか。

Agent が利用した情報は FACT だったのか。

例外時に正しく停止したか。

こうした観点から、Agent の実行を Business Structure へ照らして検証する必要がある。

したがって、

Architect
→ Build
→ Authorize
→ Execute
→ Audit

という分離も重要になる可能性がある。

これは Cybersecurity Audit より広い。

Business Logic / Agent Governance Audit

と呼べる領域である。

Part V

EBA はこの領域へ応用できるか

20. ここで初めて EBA を考える

ここまでの議論は、EBA を前提としていない。

AI エージェントが企業のデジタル労働主体になると仮定し、その際に必要となる機能を構造的に追った結果、

Business Structure を形成・検証する機能が必要になるのではないか

という問題へ到達した。

では、この問題をどのように扱えるだろうか。

ここで一つの可能性として、EmzStyle Business Advisor（EBA）の考え方を応用できないかを考察する。

---

21. 現在の EBA が扱っているもの

EBA は、AI エージェントを構築するために設計されたものではない。

また、人間の意思決定を代行する AI でもない。

EBA が扱う対象は、業務・事業・専門活動における構造である。

対象を単なる文章としてではなく、複数の要素と関係から構成されるものとして捉える。

例えば、

Entity、

Definition、

Attribute / State、

Behavior、

Input、

Output、

State Change、

Relationship、

Assumption、

Actor、

Responsibility、

Causality、

Dependency、

Process

などを区別しながら、対象の構造を整理する。

また、

何が FACT なのか。

何が仮説なのか。

何が未確定なのか。

何が判断対象なのか。

その判断が何に依存しているのか。

誰が判断するのか。

といった構造を明確にする。

目的は答えを代行することではない。

人間が判断に耐える構造を形成することを支援することである。

---

22. EBA と Agent Builder は別物として考える

AI エージェント時代へ EBA を応用する場合でも、EBA そのものを Agent Builder にする必要はない。

Agent Builder に必要なのは、

Agent 構築、

API、

Workflow、

Tool Use、

Security、

Agent Design

などについての知識である。

これは知見 AI によってかなり支援できる可能性がある。

一方 EBA が扱える可能性があるのは、その上流である。

企業の現実から、

用語の不一致を発見する。

定義を明確にする。

Entity を識別する。

Input と Output を整理する。

判断条件を整理する。

主体と責任を分ける。

依存関係を明らかにする。

Human と Agent の境界を整理する。

その結果を Agent Architecture へ渡す。

この役割であれば、EBA の現在の構造的な考え方との連続性がある。

---

23. EBA から Agent Architecture へ

将来的には、次のような接続を考えることができる。

Human / Business Reality
↓
EBA による構造整理
↓
Business Structural Model
↓
Human Confirmation
↓
Agent Architecture
↓
Agent Builder / Platform
↓
AI Agents
↓
Identity / Authorization / Security
↓
External Services / Other Agents
↓
Transaction / Payment
↓
Independent Audit

重要なのは、

Human Confirmation

である。

企業固有の定義や判断について、EBA 自身が勝手に正解を作るのであれば、それは本白書で問題としてきた AI エージェントと同じ問題を再生産する。

EBA が行うべきなのは、

「この定義が正しい」

と決定することではなく、

「営業部門と経理部門で『顧客』の定義が異なっている」

「この判断条件が確定していない」

「この Output を次工程が FACT として利用しているが、その根拠が明確ではない」

といった構造を可視化することである。

最終的に企業固有の意味を確定する主体は、人間または組織である。

---

24. EBA の将来仮説

この考え方を進めると、EBA は将来的に、

Human が判断可能な構造

を形成する支援から、

AI Agent が実行可能な構造

さらに、

第三者が監査可能な構造

へ接続できる可能性がある。

これは現在の EBA の機能をそのまま意味するものではない。

また正式な製品ロードマップを示すものでもない。

あくまで、AI エージェント社会で業務構造ガバナンスが必要になるという仮説から、現在の EBA の構造的アプローチを適用した場合に見えてくる将来可能性である。

Part VI

AI エージェント時代のテクノロジー・ロードマップを考える

25. 技術ではなく「技術の間」に現れる市場

AI エージェント時代には、多くの技術市場が形成されると考えられる。

AI Agent。

Agent Platform。

Identity。

Authorization。

Cybersecurity。

Payment。

Audit。

これらはそれぞれ重要である。

一方、本白書が注目するのは、それぞれの技術そのものではなく、**それらを企業活動として成立させるための接続部分**である。

既存のテクノロジー・ロードマップでも、AI エージェント、AI と人間の協働、自動化・自律化、デジタル ID、Cybersecurity などは既に重要テーマとして扱われている。

したがって本白書は、これらのテーマが欠落していると主張するものではない。

むしろ、

これらの技術を企業固有の仕事へ接続するとき、その仕事の意味・判断・責任構造を誰が扱うのか

という問いを追加するものである。

技術市場の次に、

業務構造ガバナンスという機能領域

が顕在化する可能性はないだろうか。

---

26. 100 兆個 AI エージェント社会で不足するもの

将来 AI エージェントが何個存在するかは分からない。

100 兆個という予測が実現するかも分からない。

どの Agent Platform が勝つかも分からない。

どの Identity Platform が標準になるかも分からない。

決済がカード、銀行、ステーブルコイン、その他の仕組みのどれを中心に発展するかも分からない。

しかし、AI エージェントが大量に企業活動へ参加するのであれば、Agent 一体一体の能力だけでは企業活動は成立しない。

人間の会社がそうであるように、

役割、

定義、

権限、

責任、

プロセス、

判断、

例外、

監査

が必要になる。

AI エージェントが増えるほど、

Agent の能力を高める問題

から、

多数の Agent を企業活動として成立させる構造の問題

へ重心が移っていく可能性がある。

---

27. 結論 — AI エージェントの前に「構造」がある

AI エージェントは、企業活動を大きく変える可能性を持つ。

その理由は、単に AI が賢くなったからではない。

AI が、

理解し、

解釈し、

コミュニケーションし、

システムを利用し、

行動できるようになるからである。

これによって、従来人間が埋めていた手続きの隙間を AI が埋められるようになる。

しかし、

AI は手続きの隙間を知能で埋められる。
手続きの隙間を埋められるということは、判断の隙間まで埋めてしまえる。

そして、そのさらに前には意味の問題がある。

「顧客」とは何か。

「受注」とは何か。

「納品」とは何か。

「完了」とは何か。

人間同士でさえ一致していなかった意味を、AI が推測して実行し始める。

AI エージェント時代の最初の障害は、

AI が企業を理解できないことではなく、企業自身が自らの業務を同じ意味で理解していないこと

なのかもしれない。

ローコードは、作ることを簡単にした。

しかし正しいシステムを自動的に作ったわけではなかった。

AI エージェントは、さらに実行することを簡単にする。

だからこそ、上流にある構造が重要になる。

AI エージェントを作る前に、業務がある。

業務の前に、目的がある。

実行の前に、判断がある。

判断の前提には、定義がある。

そして、それらの間には構造がある。

AI エージェント時代に必要なのは、「より賢い AI」だけではない。

Human と AI Agent が、同じ意味、適切な判断、明確な責任と権限のもとで仕事を成立させるための構造

ではないだろうか。

本白書では、その領域を業務構造ガバナンスとして提示した。

そして、その一つの実現可能性として、EBA の構造的アプローチを応用できるのではないか。

これは現時点では仮説である。

しかし AI エージェントが「座学だけの新人コンサル」から、本当に企業の一員として働き始めるならば、

その新人をさらに賢くすることと同じくらい、その新人が働く「会社の仕事」を構造化することが重要になる。

それが、AI エージェント時代に業務構造ガバナンスが必要になる理由である。

本白書における事実と仮説の境界

本白書では、AI エージェント、Identity、Authorization、Cybersecurity 等について、2026 年 9 月時点で公表されている技術動向を背景としている。

一方、以下は将来の確定事実ではなく、本白書における構造仮説である。

- AI エージェントを「デジタル労働主体」として捉えること
- AI エージェントの普及によって Semantic / Definition の問題が重要性を増すこと

- Implementation の容易化に続いて Interpretation / Execution の容易化が進むこと
- Business Structure が AI 導入の重要なボトルネックになること
- Business Structural Model が必要になること
- 業務構造ガバナンスが独立した機能領域として形成されること
- Business Logic / Agent Governance Audit が発展すること
- EBA の構造的アプローチをこの領域へ応用できる可能性

これらは今後の技術、市場、企業導入の進展によって継続的に検証する必要がある。

AI エージェント時代の業務構造ガバナンス
―「座学だけの新人コンサル」が企業で働き始めるとき―

White Paper Draft v2.0
September 2026
EmzStyle LLC

本ホワイトペーパーについて

本ホワイトペーパーは、
前田 稔（エムズスタイル LLC）による独自の調査・分析および
構造知性フレームワークに基づき作成されています。
本資料は、特定の解決策や結論を提示するものではなく、
判断に必要な構造や視点を整理することを目的としています。

著作権・利用条件

本資料に含まれる文章・図表・分析内容・構造フレームワークは、
著作権法および関連法令により保護されています。
本資料の利用条件は、以下に定める
「ホワイトペーパー利用規約」に従うものとします。
🔗 https://emz-style.com/whitepaper-terms

利用区分の概要

- 無料版（要約・抜粋）
  社内共有・紹介目的での利用は可能です（改変・商用利用不可）
- 有料版（個人）
  個人学習目的に限り利用可能です（社内共有不可）
- 法人向けライセンス
  社内での配布・研修・教育用途での利用が可能です

※詳細は上記利用規約をご確認ください。

最後に

本資料をお読みになり、

- 判断に迷う点がある
- 自社の状況に当てはめると違和感がある
- このまま進めてよいのか確信が持てない

と感じられた場合は、

それ自体が重要なサインです。

ご相談・ご質問は、以下よりお気軽にお寄せください。
🔗 https://emz-style.com/contact
（※法人向けのご相談・講演・研修のご依頼もこちらから承っています）